

24) 20 世紀前半における京都・岩倉の“国際化”について（その 2）

The Internationalization of Iwakura, Kyoto in the First Half of the 20 th Century (2)

愛知県立大学 橋本 明

Akira HASHIMOTO

明治期以降、わが国の国際化の過程で生じた「岩倉は日本のゲール（Geel）である」という認識の
みが、岩倉を近代精神医療につなぎとめることが
できた。この認識がなければ、明治期以前に数多
く存在した伝統的な治療法の一つとして、早晩衰
退し、消滅し、忘却される運命をたどったはずで
ある。本研究の目的は以上の点を検証しながら、
岩倉の精神医療史を読み直すことにある。この際、
本当に「岩倉は日本のゲール」なのかといった評
価の問題は重要ではない。その認識が生まれ、維
持され、強化されたこと自体が重要なのである。

さて、ロシア人医師スチーダ（Stieda）に由来す
ると理解されている「岩倉は日本のゲールである」
という認識の起源をさぐっていくと、これまで喧
伝されてきた岩倉の発展史は虚構に満ちているこ
とがわかる。京都癲狂院の設立（1875 年）や精神
病者監護法（1900 年）によって瀕死の状態にあっ
た岩倉を、ヨーロッパ留学を終える頃ゲールを視
察した呉秀三が擁護し（1902 年）、岩倉を訪れたス
チーダの「岩倉は日本のゲールである」との発言
（1906 年）で外国人から「お墨付き」を与えられ、
土屋栄吉の尽力などで岩倉の名も海外に知れ渡っ
た、というのが一般的な理解である。だが、呉秀
三はヨーロッパ留学以前に岩倉をゲールと類似の
ものと既に認識しており（『精神病学集要・後編』
1895 年）、昨年の本学会でも示したようにスチー
ダ発言の出所は日本側の着想であると考えられ
る。とすれば、この認識はどこまで遡るのか。

1885 年、ドイツに留学中の榊俣はベルリン精神
病学会で、「日本の癲狂事情」（Ueber das
Irrenwesen in Japan）を報告し、京都癲狂院に触
れているが、岩倉の言及はない。榊が留学してい
た当時のベルリンは、ゲールをモデルにした精神
病者の家庭看護のまさに導入期であった。榊も訪
問している市立ダルドルフ（Dalldorf）精神病院で

は 1884 年にザンダー（Sander）の指導で家庭看護
が始まり、榊が精神病学を学んだメーリ（Moeli）
はそこで医長をしていた。1886 年に帰国した榊
は、19 世紀終わり頃のヨーロッパにおける家庭看
護への関心のピークを肌で感じたことは想像に難
くない。一方、1890 年の私立京都癲狂院の院長・
高松彝による「ペンシルバニア癲狂院閣下ニ送ル
答辯書」では、岩倉が未だ伝統的医療に属するも
のと捉えられている。1891 年にベルリンに留学し
た島村俊一は榊と類似の留学環境のもと、ダルド
ルフ精神病院で家庭看護の実際を知り得ていたに
違いない。島村は 1894 年 11 月に帰国し、12 月に
は京都府医学校教諭に就任した。そして、翌年
には呉の『精神病学集要・後編』が出され、注目す
べきことにゲールと岩倉が同じ「私宅看護」の範
疇で取り扱われた。これは実質的に「岩倉は日本
のゲールである」との認識に等しいと考えてよか
ろう。ただし、この着想が呉のオリジナルである
かどうかは不明である。榊、島村、ベルリン・ダ
ルドルフ、家庭看護、京都、というキーワードを
羅列したところで、「岩倉は日本のゲールである」
という認識の出発点は特定できないが、この着想
は榊や島村のベルリン留学体験と不可分の関係に
あるのではないか。しかも、高松の「答辯書」の
認識が精神医学界に共有されていたものだとす
ると、『精神病学集要・後編』が 1895 年に発行さ
れるまでの約 5 年の間に岩倉認識の変化があったこ
とになる。

だが、1906 年にスチーダをして「岩倉は日本の
ゲールである」と言わしめるまでには、なお 10 年
以上の時間を要する。この間にスチーダ発言を導
く素地を用意したのが、言うまでもなく呉秀三で
あり、彼の留学体験が「岩倉は日本のゲールであ
る」という認識の総仕上げに決定的な役割を果た
すのである。